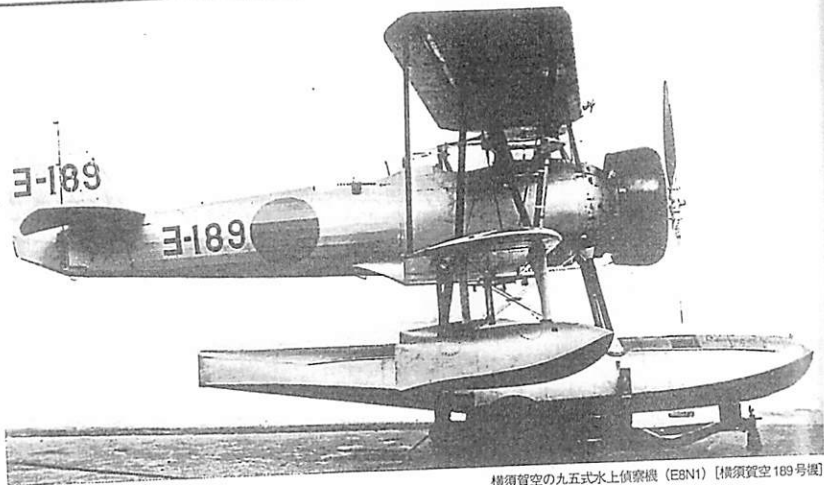


九五式水上偵察機 (E8N1~2)

Nakajima

中島

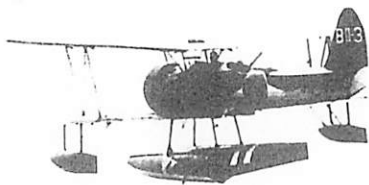


横須賀空の九五式水上偵察機 (E8N1) [横須賀空 189号機]

昭和8(1933)年3月17日、海軍は八試水上偵察機の名で九〇式二号二型水上偵察機 (E4N2) に代わるべき寿発動機二型装備の軽快な近距離用艦載複座水上偵察機の開発を愛知、川西、中島の3社に命じた。

そして、昭和8年から9(1934)年にかけて各社の試作機が完成した。川西機 (E8K1、社内名P) は近代的な低翼単葉単浮舟機であったが、愛知機 (E8A1、社内名AB-7) と中島機 (E8N1) は複葉単浮舟機であった。

MSという社内名で三竹 忍技師を主務者として設計され、昭和9年3月に1号機が完成した中島の八試水偵は、九〇式二号二型水偵の発達型と言えるもので、同じ寿発動機二型改一を搭載しており、全幅も全長もほとんど変わらなかったが、翼面積は約3.1㎡小さく、重量は約100kg増大していた。



艦艦全剛搭載の九五式水上偵察機 (E8N1)

性能は、最大速度が36.3kt向上したほか、上昇性能等も向上していた。

3社の試作機の比較審査が開始されたのは昭和9年春で、性能は伯仲していたが、操縦性、安定性、実用性の優れた中島機の採用が内定した。

そして、中島機は、さらに5機の増加試作機を製作して実用実験を実施し、その結果に基づいて改修を加えたのち、昭和10(1935)年9月17日に九五式水上偵察機として制式採用となった。

初期の生産機は前述のように最大出力580馬力の寿発動機二型改一を装備していたが、後期の生産機では最大出力630馬力の寿発動機二型改二に強化されており、寿発動機二型改三を装備したものもあった。なお、初期型を九五式一号水上偵察機 (E8N1)、後期型を九五式二号水上偵察機 (E8N2) と称したが、これは公式の分類ではなく、「航空機ノ名称」(昭和13年10月11日改訂) や「海軍飛行機略符号一覧表」では、区別せずに、どちらも九五式水上偵察機としている。

中島で試作機(2機)と増加試作機(5機)に続いて、昭和9年から15(1940)年の間に約700機生産したほか、川西で13年から15年にかけて48機生産しており、総生産数は約755機に達した。このうち、50機が終戦時に残存していた。

昭和10(1935)年から戦艦、巡洋艦、水上機母艦、基地航空隊への配備が開始され九五式水偵の初陣は

12(1937)年8月11日の水上機母艦「神威」搭載機の杭州、上海方面の偵察で、14日には出雲と川内の搭載機が敵機を迎撃2機を撃墜して、初戦果を記録し、その後も、偵察、急降下爆撃、掩護、防空などに活躍、万能機ぶりを発揮した。

開戦当時、第一線配置についていた複座水偵の大部分は本機で、戦艦、巡洋艦、水上機母艦の搭載機が南方進攻作戦に参加、偵察、索敵、船団掩護、泊地防空などに活躍した。インド洋開戦で空母ハーミスを見つけたのは戦艦榛名の九五式水偵であった。17(1942)年頃から次第に零式観測機と交代していったが、その後も本土方面で哨戒、連絡、訓練などに活躍を続けた。

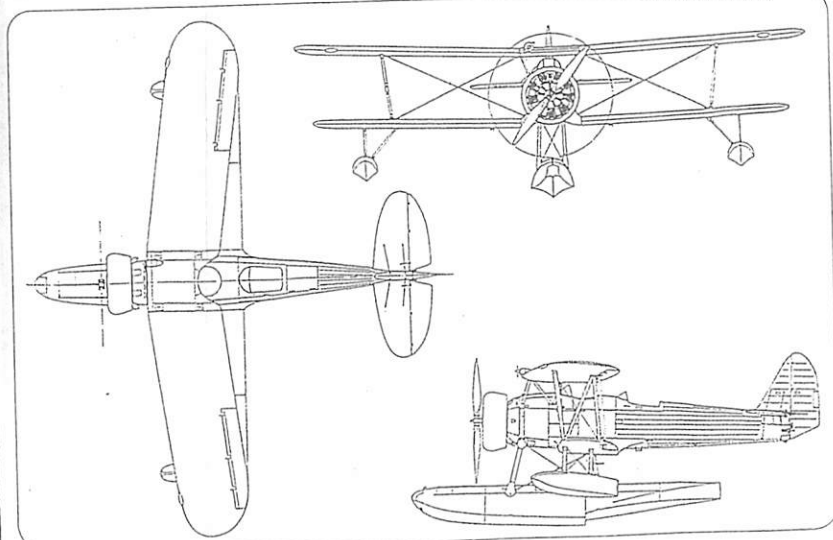
九五式水偵 (E8N1)

.....
 発動機 : 名称 寿発動機二型改二、設計 中島、形式 空冷星形9気筒、公称出力460hp/3,000m、最大出力630hp/S.L., 基数1

プロペラ : 全鋼製2翅固定ピッチ式、直径2.70m
 寸度 : 全幅10.980m、全長8.81m (279号機まで) ~ 8.89m (280号機以降)、全高3.84m、面積 : 主翼26.5㎡

重量 : 自重1,357kg、搭載量(正規)543kg、(過荷重)743kg、全備重量(正規)1,900kg、(過荷重)2,100kg

燃料 : 594ℓ、滑油 : 51ℓ



日本海軍制式機大鑑 ● 81

諸比 : 翼面荷重(正規)71.7kg/m²、馬力荷重(正規)4.13kg/hp
 性能 : 最大速度161.5kt (299km/h) / 3,000m、巡航速度100kt (185km/h)、降着速度52.5kt (97km/h)、上昇時間3,000mまで6' 31"、実用上昇限度7,270m、航続距離485~980nm (898~1,815km)
 武装 : 7.7mm固定銃×1 (前方・胴体)、7.7mm旋回銃×1 (後上方)、爆彈30kg×2
 乗員 : 2名
 データ出所 : 海軍

- 主要搭載艦 : 水上機母艦・能登呂、神威、千歳、千代田、瑞穂、特設水上機母艦・香久丸、衣笠丸、神川丸、山陽丸、讃岐丸、相良丸、聖川丸、国川丸、戦艦・金剛、比叡、榛名、霧島、扶桑、山城、伊勢、日向、長門、陸奥、巡洋艦・加古、古鷹、衣笠、青葉、妙高、那智、足柄、羽黒、高雄、愛宕、摩耶、鳥海、最上、三隈、鈴谷、熊野、利根、筑摩、球磨、多摩、香取、鹿島、香椎、海防艦 : 出雲
- 使用部隊 : 横須賀空、佐世保空、霞ヶ浦空、館山空、呉空、大湊空、鹿島空、博多空、小松島空、宿毛空、第2河和空、天草空、7空、8空、12空(初代)、16空(初代)、16空(2代)、17空、18空、19空、21空(初代)、22空、23空、952空、第11戦隊付属飛行機隊、江上飛行隊

2022年6月22日 樋口記

岡島威(たけし) 海軍大尉(没後昇進し、少佐従六位) [陸軍では「大尉」と呼ぶ。]

この水上機は、岡島威大尉が搭乗したのと同じ型である。岡島大尉は、1937年9月19日に南京空爆に参加した後、揚子江で敵艦の傍に着水し、水上機の後席の機関銃を取り外し、それを抱いて敵艦に乗り込み、壮絶な戦死を遂げた。蔣介石と戦うのは、当時の日本の感覚で言うと、テロリストと戦う感覚だそうです。

詳細な資料は以下をご参照ください。(インタナーネット検索)

岡島詳吉著 『岡島威[海軍少佐従六位・日支事変・支那事変]』、文生書院、昭和14年。

岡島詳吉氏は岡島威の父親で、陸軍少将。

『海の荒鷲実践録』 讀賣新聞社社会部編、昭森社、昭和13年。

『海鷲実践録』 讀賣新聞社社会部編、興亜書院、昭和14年。国立国会図書館デジタルコレクション。